

はじめに

本書のタイトルは『病態生理学』としました。これまでは病理学として扱われていたものと、疾病論とその中の症状や徴候についての内容を一つの分野として統合したものです。これらは従来、別々の領域にあったものですが、なぜ身体に不調が起こるのかその原因を考え、原因別にみるとどのような整理ができるのかを考え、それらが具体的な病気として実際の患者さんにどのように現れるのかと考えると、決して別々のものではなく、むしろとても関連が深いものであると思われるためです。

医学教育で使用される教科書における病理学は、主に顕微鏡によって、身体の不調を細胞レベルのメカニズムで整理分類するものです。したがって、多くの記述が顕微鏡解剖学、すなわち組織学の知識体系と結びついています。

しかし看護実践でより大切なのは、機能別に人間を見、その機能の不調がなぜ起こり、どのように現れるかを理解することではないかと考えます。つまり、病態生理的なとらえ方が、看護実践にはより有効であると思われれます。

この「ナーシング・グラフィカ」シリーズではそのような考え方から、従来、別々の分野とされていた解剖学と生理学とを一体化させ、『解剖生理学』としています。この考え方は、米国ではすでに常識として定着しています。

そこで本書『病態生理学』では、従来の病理学の中で疾病の起こるメカニズム別（病因別）に分類整理した「病態」をまず学習し、次にその不調がどのように現れるかという実践的なとらえ方ができるように、よく遭遇し、なおかつ重要な「疾患」を例に挙げ、最後にそれらに現れる症状・徴候を「症候」として整理しました。これら一連の学習を終えたならば、眼前の患者さんの話していることや私たちが観察できたことから、その患者さんに起こっている変化が、根本から理解できるようになるはずですよ。

より実際の臨床場面に即した学習が可能となるよう大胆な再構築をした本書は、実習が進むにつれ、また実際の臨床活動を進めるにつれ、その効果が現れてくるものと思っています。さあ、学習という冒険に乗り出しましょう。

放送大学大学院文化科学研究科教授
名古屋大学名誉教授

山内豊明